

FRBR からみた日本の MARC の特徴

橋詰秋子(慶應義塾大学大学院文学研究科) hasiaki@slis.keio.ac.jp

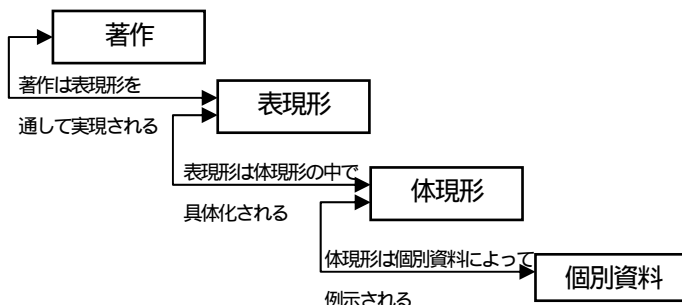
1. 研究目的・問題意識

IFLA が提唱する『書誌レコードの機能要件 (FRBR)』¹⁾モデルは、現在進んでいる図書館目録の高度化の動きに大きな影響を与えている。中でも、同モデルの中で定義されている「著作」「表現形」「体現形」「個別資料」という知的・芸術活動の成果を表す実体(第1図)は、目録の記述対象を明確に定義したモデルとして、高度化を目指す様々な取組みの中に取り入れられている。現在、パリ原則に代わる新しい国際目録原則(フランクフルト原則)²⁾の策定が進められているが、FRBR はこの新原則において基盤として用いられている、

具体的に言えば、フランクフルト原則では、目録が持つべき機能として、書誌的資源の発見、書誌的資源の識別、書誌的資源の選択、個別資料へのアクセス手段の入手、ナビゲーションを挙げているが、そのうち 発見機能の中で、FRBR の「著作」「表現形」「体現形」「個別資料」を、以下のように取り入れている。

利用者が、次の一群の書誌的資源を**発見**できるようにする

- ・同一の**著作**に属する全ての資源
- ・同一の**表現形**に属する全ての資源
- ・同一の**体現形**に属する全ての資源



第1図 FRBR の知的・芸術活動の成果を表す実体

・特定の個人、家族、団体の全ての**著作及び表現形**

フランクフルト原則策定後は、各国の目録にこうした機能を反映させるよう求められると考えられるが、日本ではこれまで「著作」「表現形」「体現形」「個別資料」という概念を意識せずに目録が作られており、これらの実体が日本の目録にどの程度見出せるのかは分からない。

そこで本研究では、目録の中でも目録を構成する MARC に焦点をあて、日本の MARC フォーマットで規定されたデータ要素に「著作」「表現形」「体現形」「個別資料」はどの程度対応づけられるか、機能的観点による日本の MARC の特徴は何かを探る。

2. 研究対象・手法

本研究では、日本の MARC の例として Japan/MARC(J/M)を取り上げた。対象に J/M を選んだのは、J/M が日本を代表する MARC であり、日本の MARC の特徴を明らかにする本研究の対象としては、その標準的なフォーマットが適切だと判断したためである。具体的には、現時点での最新版である Japan/MARC2006 フォーマット³⁾を用いた。

FRBR は、書誌レコードに求められる諸機能を【実体】、実体の【属性】、実体間の【関連】、【利用者タスク】によって表した概念モデルである。本研究では、J/M フォーマットに含まれる個々のデータ要素を、FRBR で定められた【実体】及び【属性】【関連】と対応付け、さらにそれを【利用者タスク】と

結びつけることで、J/MとFRBRとの対応付けを行った。なお、今回は「著作」「表現形」「体现形」「個別資料」以外の【実体】に対応付けられるデータ要素は対象外とし、結果分析の範囲とはしなかった。

対応付けを行った結果は、資料タイプ(後述)別に分析を行い、データ要素と「著作」「表現形」「体现形」「個別資料」という【実体】の対応関係に関して、J/M フォーマットの特徴を把握した。続いて、【利用者タスク】を用いて、今回のJ/Mの結果と既に同様の調査が行われているMARC21の結果とを比較し、J/Mの機能的傾向を明らかにした。

3. 結果・分析

3.1 J/Mフォーマットの特徴

MARCフォーマットには、地図資料など特定の資料群を扱えるよう、対象とする資料の種類を限定したデータ要素が存在している。また、「多巻もの」など特定の場でのみ使用される要素もある。そこで本研究では、資料の種類等でタイプを分け、J/Mフォーマットに含まれるデータ要素を資料タイプごとに整理した。整理したデータ要素と実体との対応関係をまとめたものが、第1表である。

第1表 実体と対応付けられるJ/Mのデータ要素数

資料タイプ	対応付けられる実体					合計
	著作	表現形	体现形	個別資料	その他	
フォーマット全体	8	8	81	2	45	189
	4%	4%	43%	1%	24%	
単行書 (統一タイトルあり)	6	2	33	2	40	123
	5%	2%	27%	2%	33%	
単行書 (統一タイトルなし)	3	2	36	2	40	123
	2%	2%	29%	2%	33%	
単行書 (多巻もの)	3	2	47	2	41	136
	2%	1%	35%	1%	30%	
逐次刊行資料 (雑誌)	5	2	42	2	33	117
	4%	2%	36%	2%	28%	
電子資料	3	2	31	2	33	104
	3%	2%	30%	2%	32%	
音楽・映像資料	3	2	32	2	34	107
	3%	2%	30%	2%	32%	
地図資料	6	6	26	2	32	104
	6%	6%	24%	2%	31%	

実体の側面から第1表を見ると、J/Mの特徴は次のとおりである。最も多くデータ要素と結び付けられている実体は「体现形」で、どの資料タイプにおいても、全体の30%程度が「体现形」と結びつく要素であった。例えば、「単行書(統一タイトルあり)」という資料タイプでは、[ISBD]や[出版地・頒布地]といった33のデータ要素が「体现形」と対応付けられた。その一方で、「著作」「表現形」「個別資料」に結びつく要素は少なく、地図資料を除き、3つ合わせても全体に占める割合が10%に満たなかった。

「著作」に対応付けられる要素は、フォーマット全体では8つ([対象利用者コード],[官庁刊行コード],[タイトル標目のカタカナ形],[タイトル標目のローマ字形]など)存在していた。が、資料タイプ別には、電子資料の3つから地図資料の6つまでばらつきがあった。単行書では、タイトル標目において統一タイトルが使われていない場合、つまり「単行書(統一タイトルなし)」や「単行書(多巻もの)」という資料タイプでは、「著作」に対応付けられる要素は3つしかなかった。そして、その3つの要素に対応付けられる属性や関連は「想定利用者」「著作のソース」「翻訳」といったもので、「著作」を識別同定できるものではなかった。

「表現形」に結びつく要素は少なく、地図

資料以外のタイプでは、どれも2要素([テキストの言語コード],[原文の言語コード])しか存在していなかった。その属性は「表現形の言語」であった。

次に、資料タイプの面から結果を見ると、傾向に多少違いが見られた。地図資料は、地図資料限定のデータ要素が、[国際海図番号]のような「著作」と結びつく要素や[縮尺タイプ]のような「表現形」と結びつく要素であったため、「著作」と「表現形」に対応付けられるデータ要素の数が多くなっていた。

また、日本で多数出版されていると言われる多巻もの(セットもの)の単行書では、[多巻

ものの各巻著タイトル標目のカタカナ形]といった多巻もの限定のデータ要素が「体現形」と結びついていた。そのため、多巻もの以外の単行書タイプに比べて体現形の占める割合が高くなっていた。

3.2 MARC21 データ要素との機能的相違

J/M のデータ要素と MARC21 のデータ要素とを [利用者タスク] の観点から比較した。FRBR の [利用者タスク] は、発見・識別・選択・入手の 4 種類あるが、ここでは、前述したフランクフルト原則での発見の機能と関係付けられると推測できる発見タスクを取り上げ、それを 著作の発見、表現形の発見、体現形の発見と細分したタスクを使って分析を行った。

MARC21 に関しては、米国議会図書館によって既に FRBR との対応付けが行われているため^v、比較にあたってはその結果を用いた。また、MARC21 は膨大な数のデータ要素をもつ大規模なフォーマットであるため、本研究では対象を一般的な資料タイプである単行書に限定した。実際には、MARC21 のよく使われるデータ要素と J/M

の「単行書(統一タイトルあり)」タイプとを比較した。

著作の発見

J/M において、「著作の発見」タスクを支援する属性が対応付けられるデータ要素は、第 2 表にあるとおり、6 要素あり、うち半数は [統一タイトルが使われた] タイトル標目] であった。一方、MARC21 に同様の要素は 11 存在していた。MARC21 には、小説や戯曲など著作の種類を示す「著作の形式」属性に結びつくデータ要素が 4 つ ([Bibliography, etc. note] [Form subdivision] など) あったが、これらは J/M にはなかった。

FRBR のレポート¹では、各属性について [タスク] を支援する重要度を 3 段階で提示している。本研究の結果、「著作の発見」タスクの達成に高い重要度をもつ [属性] と対応付けられたのは、J/M では [タイトル標目]、MARC21 では [Main Entry -- Uniform title]、[Subject added entry -- Personal name]、[Added entry -- Uncontrolled related/analytical title] のデータ要素であった。ただし、J/M の [タイトル標目] は、統一タイトルが使

第 2 表 「著作の発見」タスクを支援するデータ要素

MARC	右記の属性・関連と対応付けられるデータ要素		FRBR の属性・関連	重要度	
MARC21	130	Main Entry -- Uniform title	\$a Uniform title	著作のタイトル	高
	130	Main Entry -- Uniform title	\$p Name of part/section of a work	著作のタイトル	高
	600	Subject added entry -- Personal name	\$t Title of a work	著作のタイトル	高
	740	Added entry -- Uncontrolled related/analytical title	\$a title	著作のタイトル	高
	300	Physical description	\$e Accompanying material	著作の形式	中
	504	Bibliography, etc. note	\$a Bibliography, etc. note	著作の形式	中
	600	Subject added entry -- Personal name	\$v Form subdivision	著作の形式	中
	610	Subject added entry -- Corporate name	\$v Form subdivision	著作の形式	中
	651	Subject added entry -- Geographic name	\$v Form subdivision	著作の形式	中
	130	Main Entry -- Uniform title	\$s Version	その他の特性	低
130	Main Entry -- Uniform title	\$f Date of a work	著作の成立日付	低	
J/M	551 ~ 10	タイトル標目 (統一タイトルの場合)	A カタカナ形	著作のタイトル	高
	551 ~ 10	タイトル標目 (統一タイトルの場合)	X ローマ字形	著作のタイトル	高
	551 ~ 10	タイトル標目 (統一タイトルの場合)	B 漢字形	著作のタイトル	高
	354	原タイトル注記	A 翻訳資料の原タイトル	翻訳	高
	100	一般処理データ	A 対象利用者コード	想定利用者	低
100	一般処理データ	A 官庁刊行物コード	著作のソース	低	

用されている場合のみ「著作の発見」に関して高い重要度を持ち、そうでない場合は「表現形のタイトル」属性と結びつくため^v、「著作の発見」を直接支援するものではなくなる。このことは、データ要素の中身が特定の、「著作の発見」を支援する要素をもつ MARC21 との大きな差異だと考えられる。

表現形の発見

どちらも「表現形の発見」タスクに結び付けられるデータ要素は少なく、J/M には1つ[Language of a work], MARC21 には2つ([テキストの言語コード], [原文の言語コード])のみ存在していた。どちらの要素も「表現形の言語」という属性に対応づけられるもので、この点からも J/M に MARC21 との大きな差異はなかった。

体現形の発見

J/M では[ISBN]や[出版者・頒布者等]などの11要素が、MARC21 では[ISBN]や[Extent (number of pages)]といった4要素が、「体現形の発見」タスクを支援するデータ要素であった。それらに対応付けられた属性は、「体現形識別子」「出版者・頒布者」「キャリアの数量」であり、これは J/M と MARC21 で全く同じであった。J/M の要素数が多いのは、出版者・頒布者が漢字表記・ローマ字表記・カタカナ表記と表記ごとにデータ要素となっているためであった。

4. まとめ・考察

本研究の結果、J/M には「著作」に対応付けられるデータ要素は少なく、また、統一タイトルを除いては、「著作」を識別同定できる要素はないことが明らかとなった。このことは、MARC21 と比べて「著作の発見」タスクを支援する要素が少ないことに関係していると考えられる。また、「表現形」に関しても、J/M には対応付けられるデータ要素がなかった。

これからの目録の機能を考えると、フランクフルト原則で示されているように、FRBR が提示する「著作」や「表現形」という実体を MARC の中に組み込み、その上でそれらを目録で活用していくことが重要になると考えられる。しかしながら、本研究の結果から、現在の J/M フォーマットに、こうした活用につながるデータ要素は十分には含まれていないことが明白である。今後は、日本の MARC に「著作」「表現形」を活用できる仕組みを備えさせるべく、「著作」「表現形」の活用につながるデータ要素を MARC に追加していくなど、MARC だけでなく目録規則自体の検証・見直しを含めて、MARC を再検討・再構築していく必要があるだろう。

(注・引用文献)

- i 書誌レコードの機能要件：IFLA 書誌レコード機能要件研究グループ最終報告. 和中幹雄, 古川肇, 永田治樹訳. 日本図書館協会, 2004, 121p.
- ii Statement of International Cataloguing Principles. <http://www.nl.go.kr/icc/down/070412_2.pdf> [最終確認日：2007-10-16]
- iii 国立国会図書館. JAPAN/MARC2006 フォーマット. <<http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/jmarc2006.pdf>> [最終確認日：2007-10-16]
- iv Network Development and MARC Standards Office Library of Congress. Functional Analysis of the MARC21 Bibliographic and Holdings Formats. <<http://www.loc.gov/marc/marc-functional-analysis/functional-analysis.html>> [最終確認日：2007-10-16]
- v Library of Congress NDMSO. A Summary of Commonly Used MARC 21 Fields. <<http://www.loc.gov/marc/umb/um07to10.html>> [最終確認日：2007-10-16]
- vi 『日本目録規則 1987 年版 改訂三版』で、タイトル標目は、原則として記述中に記録されているものから選ぶとされている。